

勝海舟基金

令和4年度 活用報告

あたたかいご支援をありがとうございます。

平成30年8月から募集し、令和4年度末までに累計で、
1,107件60,156,464円のご寄附を賜っております。

ご寄附の一部を、次のとおり活用しましたので、ご報告申し上げます。

■資料の収集

勝海舟ゆかりの資料487点を購入しました。購入した資料の中から1点をご紹介します。



「西郷隆盛真影」

本資料は、紙幣印刷導入に当たり大蔵省紙幣局に招かれたイタリア人版画家エドアルド・キヨッソーネ(Edoardo Chiossone; 1833~1898)が、明治16(1883)年に創作した西郷隆盛の肖像画の複写です。

隆盛の弟・従道の目元と従弟・大山巖の口元とがモンタージュされ、隆盛の知人や遺族の意見を採り入れながら描かれました。同10年の西南戦争における隆盛の死からわずか6年という早い時期に政府の公認を得て制作されたことから、写真が確認されていない隆盛の容貌を伝える作品として、後年の西郷像に大きな影響を与えました。

しかし、太平洋戦争時に原画が焼失したことで、その様子を伝える資料は原画を写した写真のみとされてきました。こうした中、本資料は原画から直接複写した可能性があり、極めて稀少と考えられます。また、生前の隆盛と深い関わりを有した海舟の家に伝わった事実から、両者の浅からぬ因縁も感じられます。

■資料の修復

77点の資料を修復しました。修復した資料の中から1点をご紹介します。

「海舟の陣笠」



本資料は、海舟所用の漆の陣笠です。陣笠とは、風雨等から頭部を保護するために武士が被る帽子の一種です。

黒漆が塗られた表面は、金銀の微細な粉粒が混じり、梨地のような外観をしています。上部には、4つの勝家の家紋があしらわれており、定紋の「丸に剣花菱」ではなく、「可文字」が使用されています。

内側には頭部保護のための真綿のクッションやピロード地の紐が収められていましたが、原形を留めていない程、破損や欠損が進んでいました。ピロード地は、劣化と共に粉状に朽ちて破損してしまうからです。

そのため、これ以上原形が失われないよう欠損部の復元や繕いなどを施しました。

劣化で絡み合った紐を整えると、紐のまとまりや奥に隠れていたクッションが露わになり、本来の内部構造が明らかとなりました。

～原型を留めていなかった内部を整え復元し、本来の姿へ～

Before



After



海舟ゆかりの貴重な資料を守り伝えていくために、

「勝海舟基金」は現在も募集中です。

引き続きご支援ご協力のほど、心よりお願い申し上げます。

これまでにご報告してきた修復等について公開しています。 →→→



勝海舟基金の詳細は →→→
大田区立勝海舟記念館
電話 03(6425)7608

